

お伽草子『十二類絵巻』 幽香叢書本をめぐる一試論

三 浦 億 人

一 『十二類絵巻』 異本系伝本の再検討

お伽草子『十二類絵巻』は、絵巻としては、『天稚彦草子絵巻』（ベルリン国立東洋美術館蔵）、『福富草紙絵巻』（京都・妙安寺春甫院蔵）と、異類物としては、『鴉鷲合戦物語』『精進魚類物語』などと並ぶ、初期お伽草子を代表する雄品といえる。十二支とそれに属さない獣との対立という物語設定が極めてユニークであり、登場する各種動物たちの生態や故事にちなんだ叙述と擬人名は工夫が凝らされ、合戦叙述の描写も巧みであり、変化を得意とする狸の哀れな末路を語って完結する展開も優れている。とりわけ、物語中に見える和歌と画中詞は室町期の学芸に裏打ちされており、この点でも注目される。

一般に、『十二類絵巻』の伝本は、テキストの上から見て、堂本四郎氏所蔵の室町中期の制作とみられる古絵巻に代表される絵巻形式の内容・本文をもつものと、それらの詞書を中心に物語展開を軸とした内容をもつもの（物語の前半部だけを抄出した『十二類歌合』などの伝本もこれに含む）に大別される。そして、これまで

『十二類絵巻』の研究は、大部分がその絵巻系の伝本を中心としてなされてきた。しかし、近時の調査により、これらとは別の系統に属し、単なる節略本ではない異本系ともいうべき内容をもった伝本を確認することができた。ここでは、それら異本系伝本として位置づけ、国会図書館蔵幽香叢書本・国会図書館蔵寛文元年奥書本・逸翁美術館本の三本を取り出した上でこれらの異本群がもつ意味について再検討し、『十二類絵巻』伝本の中において、異本系諸本がどのように位置づけられるかを考察してみたい。また、三本の内、特に幽香叢書本については、翻刻を付し、作者像について追究する。

二 諸伝本の整理

まず、物語の梗概について略述する。

薬師十二神将の使者である十二支の動物たち（十二類）が、十五夜の月を題にして歌会を催す。そこに歌仙の名を取る鹿が狸を従えて現れ、判者の役を申し出る。犬が追い払おうとするが、龍のとりなしもあって鹿は判者となり、歌合は雅俗相和して、一同は酒宴乱舞に興じる。後日、再び歌会が計画されるが、鹿は風邪気味である

からと断る。鹿が欲待されていたのを心密かに羨んでいた狸は、それを良いことに判者の役を申し出る。しかし、十二類はこれを分不相応な推参と決めつけ、狸を打擲して追い返す。逃げ帰った狸は、この恥辱を晴らすため、十二支に属さない獣たちを呼び集め、十二類に対して仕返しの場合を企てる。その軍議では、血気にはやる狼によって夜討ちが提案される。しかし、この反十二類軍の不穏な動きは、すぐに国中に知れ渡ることとなり、十二類の軍勢は先手必勝とばかりに逆に狸軍の「境の城」に攻撃を仕掛ける。両軍激しく戦って、まづは十二類軍が勝利を収める。

敗走した狸は木のうつろに身を隠すが、古鷹の助力を得て今一度の合戦を決意する。味方となるべき獣を再び召集して、戦勝気分でお断している十二類の隙を突いて、雪辱を果たす。多くの死傷者を出した十二類軍は、このままではならじと態勢を立て直し、狸軍が陣を張っている愛宕山に攻め返す。合戦は夕刻にまで及ぶことになったが、ついに狸軍は壊滅する。命からがら逃げ帰った狸は、法体以身をやつし、月輪寺の御堂の下に隠れ、今度は鬼に化けて十二類への仕返しを試みようとするが、途中で野良犬に吠え立てられ、正体が露見する。さすがの狸もこの期に及んで復讐を断念する。そして、妻子とも別れ、法然上人の門人を尋ねて出家し、腹鼓を打って踊り念仏にいそむ。やがて、西山のほとりに隱遁するが、世間への執着は、どうしても断ち切ることができなかったという内容である。

これまでに確認されている『十二類絵巻』の伝本としては、以下

のものが知られている。

【伝本】

- ・堂本四郎氏旧蔵・絵巻三軸（室町中期の制作）
- ・細川家永青文庫・絵巻三軸（堂本家本の模写絵巻）
- ・金刀比羅宮所蔵・絵巻三軸（堂本家本の模写絵巻）
- ・大阪市立美術館・絵巻一軸（堂本家本の模写絵巻）
- ・東京国立博物館・絵巻三軸（堂本家本の模写絵巻）
- ・神宮徴古館所蔵・絵巻三軸（安永三年・右堂本家本の模写絵巻）
- ・チェスター・ヴィンテージ・ライブラリー所蔵・絵巻三軸（江戸初期写、堂本家本の模写絵巻）
- ・ニューヨーク公共図書館スペンサーコレクション所蔵・絵巻二軸（近世前期写・堂本家本の模写絵巻）
- ・ケルン東洋美術館（室町後期写・堂本家本の模写絵巻、上巻のみ）
- ・早稲田大学図書館所蔵・絵巻一軸（江戸後期写・堂本家本の模写絵巻、上巻のみ）
- ・慶応大学図書館・枳形写本（歌合の条のみ）
- ・国文学研究資料館蔵・絵巻一軸（江戸末・堂本家本の模写絵巻・平野碧山旧蔵・上巻のみ）
- 右に挙げた絵巻系の伝本は、堂本家本（『日本絵巻物全集』第十八卷所収）のように、上巻が後崇光院筆、中・下巻が青蓮院尊道親王筆とされる詞書をもつ。

これに対して、異本系の伝本群では、右の絵巻的内容から長大な挿絵が、縮小・簡略化・省略されて、場合によっては、画中詞が完

全に割愛されることもある。それにともなつて、物語化した筋の展開に興味が移行していく伝本が増える、という傾向がある。

これらを本文の上から考察すると、上巻において、絵巻系とは違つた冒頭部分をもち、前半の狸が十二類の集会へ推参する場面の記述が詳細になり、また、巻末の狸が出家する場面においても、絵巻には存在しない中世仏教の諸宗派を列挙する叙述を有するなど、江戸初期には、絵巻系とは別の系統の伝本が成立していったものと思われる（ここでは、この系統を「異本系」とよぶ）。

本稿においては、これまで論じられてきた以上の二系統とは別の本文の叙述が簡略化された異本系といえる、国会図書館蔵幽香叢書本、国会図書館蔵・寛文元年奥書絵巻、逸翁美術館本絵巻の三伝本の位相について考察してみたい。

まづ第一に、幽香叢書本は、絵巻系の特徴である挿絵や語句を伴いながら、物語内容の合戦譚の部分が挿絵とともに大幅に省略された伝本で、絵草子ではあるが、本来は絵巻様式の伝本から転写されたものと考えられる。

次に、これと同じ本文をもつた伝本として、上巻のみの残欠本ではあるが、逸翁美術館所蔵の絵巻一軸が存在する。同本は、幽香叢書本よりも、やや先だつた江戸中期までの書写とみられ、全四図の挿絵の構図にきわめて特徴があり、その点でも資料的に重要である。

これらの異本群は、以上のように形態はそれぞれ異なるが、いづれももと絵巻形式の伝本から転写・模写されたものとみえ、物語絵巻の様式や内容が流布の過程で変化していく種々相をみることに

できる。

ここで、三異本の内容の主な特徴をまとめておく。

- (1) 序段部は、版本系と内容と同じくし、冒頭文は、絵巻系伝本での欠腕を補うものとされる『粉河寺縁起』紙背文にみられる内容とは相違する。
- (2) 絵巻系の特徴である挿絵と独自の詞書・画中詞を有する。
- (3) 前半部で、十二支の動物たちに擬人名が付されている。
- (4) 歌合部分の歌・判詞が全面的に改訂されている。
- (5) 再度、歌合や合戦の日取りが改められている。
- (6) 狸軍の逆襲による大勝利から二度目の敗北までの内容を全面的に削っている。
- (7) 巻末の狸出家の場面の叙述が改められ、狸が往生する場面では結ばれている。

などの諸点を指摘することができる。

逸翁美術館本の特徴は、堂本家本絵巻や幽香叢書本の挿絵の構図が大きく異なっている点である。特に、第一図は、堂本家本で、鹿・狸が左奥に位置して、その他の十二支の動物たちが、昼夜に分かれて歌合の番組の順番に配されている（推参場面と歌合場面が兼ねられている）のに対して、逸翁美術館本では、十二支の動物たちの集会の場へ赴く鹿と狸を描くことが中心となっており、動物の配置も歌会とは無関係になっている。以下の第二図から第四図に関しても、それぞれ小異があり、第三図では、堂本家本が狸の推参と追

放を異時同図的に扱うのに対して、逸翁美術館本では、場面に区切り（別画面）を置いている。

さらに注目しておきたいのは国会図書館に蔵される寛文元年奥書絵巻である（当絵巻に関しては、二〇〇四年度名古屋大学大学院研究集会における徳田和夫氏の報告がある）。同本は、冒頭の十二類による歌合の経緯が完全に削除され、代わりに、日頭十二類に属さない悪獸から迫害を受けている十二支の動物たちが、軍評定を求めているところへ鹿と狸が面会を求めにやってくる場面から始まる設定をとる。さらに、鹿が仲間に加えられて面目を施し、叡山へ帰っていった後、狸が推参してからは、堂本家本と同様の展開をとる。

また、詞書が全く存在せず、すべて挿絵と画中詞で構成されていることは注目される。特に冒頭部分においては、逸翁美術館の絵巻の挿絵と比しても、構図面の細部にまで共通した部分が見られる。つまり、第一図が、堂本家本絵巻にみられる第一図の前に重複しておかれ、独自の物語の発端に利用されており、以下、逸翁美術館本の第二図と第四図と類似の構図も他図と交えて使用されている。おそらく、寛文年間以前に、逸翁美術館本と同様の挿絵をもった別絵巻があったと推測される。また、寛文元年奥書絵巻には、住吉如慶写の識語があることから、やはり、住吉派風の画趣をもつ逸翁絵巻との関連が想定され、さらに、寛文元年奥書絵巻には、堂本家本とは、巻の区切り方が異なっていることが確かめられ、別系の伝本の存在の推測を助けるものとなっている。

〔書誌〕

○幽香叢書本

国会図書館蔵。幽香叢書（早川香園五冊内）第六篇。写本。外題、内題なし。表紙は後補。本文料紙は斐紙。袋綴じ。墨付き丁数は四十三丁。詞書七段。淡彩の挿絵七段。詞書と挿絵の丁は、入り組んでいる場面が多い。巻末に、「此ことはかくへきよし吉田桃樹うしのしのひてのそみ給へれば、つたなき筆をそめ侍るものならし。明暦三年九月廿七日。ともし火のもとにしるしをはる。加茂香園」の識語がある。

○逸翁美術館本

絵巻一軸。上巻のみの残欠本。緑色絹地葵紋様表紙。題簽なし。見返し、金泥野毛散らし。料紙は鳥の子。天地は二〇センチ。長さは約七メートル。挿絵は、住吉派風の着色画。江戸中期頃までの写序段より詞書第三段、挿絵第四図（狸の軍評定）まで現存。

○寛文元年奥書絵巻

国会図書館蔵。絵巻二軸。上巻、鳥の子の原表紙に、「土佐内記 廣通筆写 三番 十二類巻物二巻之内上 住吉内記」と墨書。下巻（後補の紺表紙）見返しにも、同筆同内容の書き付けを貼付する。料紙は楮紙。天地二七・五センチ。上巻は、約十一メートル五〇センチ。下巻は、約十三メートル七〇センチ。上下巻の各巻末には、下題と同筆で、「右絵巻者二巻 住吉法眼如慶廣通筆写 文化十五（戊寅）二月 住吉内記」とする、識語あり。

さらに、下巻末最終紙には、「伏見宮初而東武へ御下向之節、□

□□□、□仰下書置之撰筆而奉之畢 則大樹へ之御捧物之其一也
三木新藏人奉給段廿四段 寛文初年閏八写畢」の奥書がある。また、「住之江文庫」の藏書印あり。絵は、住吉派風で、描線が細く淡彩。天地にすやり霞を付す。上巻巻頭の詞書には欠損があり、誤脱もみられる。

三 内容の特質

特に注目すべきは、擬人名に他本に見えない、幽香叢書本独自のものが多くという点である。斜線をふしたものがそうであり、鶏の名を「関の時よし」、「羊の名を「から国ていよう」、牛の名を「大角の助黒丸」、鼠の名を「穴太律師鼠玄」などが挙げられる。

次に、先行伝本では簡略化されて絵画化されていない歌合の後に鹿を欲待する場面が設定され、独自の工夫がなされていることである。「此の枝豆をまぐさとや人の申候はんずらん」(馬)、「此桃、ただ今、桃林より、取りて候」(牛)、「我が身は魚も所望になし。ただ懐紙の紙をやぶり候はん」(羊)、「下戸は異国人也。御座に参りて候。其興あり。ただここにうそぶきて、魚を食ひとらん」(虎)、「御さかづき、とくめぐりこよかし」(兔)などがそうであるが、いづれも書写者・加茂李鷹、制作を依頼した吉田桃樹両人の遊びの趣向が横溢した画中詞といえる。中でも、「下戸は異国人也」という虎の言葉や、「この桃は桃林より只今取りて候」という牛の言葉には、桃樹と李鷹の創意が込められている。

また、三十三丁から三十五丁にかけては、「月夜にやうかれあり

かん」という画中詞を付した上で、月明りに照らされる愛宕山近郊の夜景を描き出すが、これは李鷹の著『夜半の道』に俳諧に欠くべからざるものとして述べられる「山」と「月」を取り込んだものであろう。

例えば、三十八丁裏の挿絵には、十二類側の「馬」が敵方に対して弓を引く図が見えるが、この画中詞馬「うまくとひきてはなたん」は、これまでの伝本にみられない独自のものである。

四 幽香叢書本の制作圏

この幽香叢書本の末尾には、お伽草子のそれとしてはめづらしく、以下のような奥書が付されている。

此こと葉かくへきよし吉田桃樹うじのしひてのぞみ給へれば、
つたなき筆をそめ侍るものなり

天明三年九月廿七日

ともし火のもとにしるしをく

加茂李鷹

吉田桃樹は、享和二年(一八〇二)に六十六歳で没した儒学者である。字は甲夫。号には雨岡・雨窓・時雨園などがある。賀茂真淵の門下で、村田春海などとも交友が厚く、大川橋を架けた人物としても知られる。鈴木棠三氏の『近世紀行文芸ノート』(昭和四十九年、東京堂出版)には、「吉田桃樹と槃游余録」の一章が設けられ、彼の伝記と作品内容について詳細に述べられている。それによれば、吉田は、平沢元愷(がいきよくざん、旭山)の影響を受け、古代研究に強い関心を

もった人物であったとされる。わけても天明八年に出版された『槃游余録』は、伊勢神宮参詣の途次、相模・伊豆・駿河・三河などから、大和・河内・山城などを経て、播磨・石見にまで足を延ばした西国への大旅行の記録であり、鈴木氏によれば「近世紀行文の名作のひとつ」とされている。この紀行文『槃游余録』には、十本ほどの伝本が知られているのだが、その内の一本である国会図書館本（特七〇一八三〇二〇一、写本七冊、自筆稿本）を検すると、その序文には、文化十一年の男勇雄、寛政元年の平沢元愷の序とともに、幽香叢書本を吉田の依頼で筆者したとされる加茂李鷹の序が付されている（平沢と同年の寛政元年）。そこで、加茂李鷹は「今読甲夫（吉田桃樹の字）紀行。将嚙臍耳。其書以国字行。読之如目撃在前」と、吉田のリアルな取材・描写姿勢に賞讃を呈している。当該書の冒頭には吉田自身の執筆姿勢を示す言葉があり、「としへて、おほつかなくなりはてなむも、ほひなければ、ただしき、あやまれるを、わひだめもなく、やまがつ、うら人などかたりしことを、ももらさずかいづく」（句読点は私に付した）、と述べられていて在地の伝承・奇談をありのままに筆録しようとする好奇心や客観的姿勢が見てとれる。また慶応大学図書館・静嘉堂文庫に蔵される『史氏備考』四卷には伝記があり、平沢の『古老雑話』には遊女との交友についても様々な逸話が載る吉田桃樹であるが、幽香叢書本が写された「天明三年」（一七八三）は、ちょうど幕府の与力の職を辞した年にあたり、吉田の関心の領域の広さを知る資料としても貴重である。

また、その吉田に「しひてのぞ」まれて筆写したとされる加茂李鷹は、天保十二年（一八四一）に八十九歳で没した地下官人の一人で、天明六年十二月（一七八六）に甲斐国権守に三十三で任じられるまで有栖川宮諸大夫の役を務めた賀茂氏の家系に連なる人物であった。安永七年（一七七八）十二月、二十五歳で従五位下に任ぜられており、幽香叢書本筆録時には、その地位にあったと推定されるが、後には歌集『雲錦集』をまとめている。

幽香叢書本『十二類絵巻』は、この上賀茂神社の神官をも務めた李鷹と、幕府官人の職を辞したばかりの儒者・桃樹との文芸上の親密な交流を示すものとしてだけではなく、お伽草子の異類物が江戸後期の儒学者や賀茂氏の家系に、どのように享受されていたのかを知る資料としても重要であると思われる。

（みうら・おくと 大学院博士後期課程在学）

（凡例）

- 一、適宜、句読点を付したが、濁点については原態を尊重した。
- 一、画中詞に関しては、その発話者が明確になるよう、「」内に当該動物の名を示した。
- 一、存疑のある箇所についても、そのまま翻刻した。

【第一回】（鹿、狸を伴い推参するところ）

【鶏】せきのときよし

かゝるふるまひをは、とりこめよ。関をすゑてにかすな。

【猿】さる丸入道

さるふしきの推参や候へき。

【羊】から国のていよう。

【馬】右頭の権助ながつら

尾籠のものかな。これをは、はしらかさばや。

【兎】はきかもとつきすみ

た、耳をたて、申さん事を先きこしめし候へ

【虎】のべのおき風

これをた、とらへ候は、や。

【牛】だいかくのすけくろまる

た、みな、角目に成て、物な仰候ぞ。

【鼠】あなたのりつしそけん

かやうの者とも参候は、われらは引入て候はん。

【蛇】みのないし

あら、ながくしのもんだうや。

【猪】猪の宮じやはなかつ

にくし 一かけかけ候は、や

【竜】もんとうのかみたつよし

申さる、旨、尤龍見あるへきと也。

まことに子細なきにあらず。座を辰となくして判し給へ。

【犬】いぬ太郎もり家

一人もちいぬ判者所望して、鹿もやうもなく推参太しかるべからず。

はやく出給へ。

【鹿】かすかの神主あきおと

鹿しこまりて承候ぬ。はや懐紙ともを出され候へ。

【狸】

そんなのほのこと仰らる、大殿かな。御辺は、うてともさらぬほん
なうにたとへられ、我はまねけとも来らぬほたいになぞらへられた
り。めいごすてにせうれつ雲泥せり。無礼なる詞かな。や、めん
くゝに申候。各一日に一時をこそまもり給へ。我は一月におほくの日
をつかさとり。ふつ鹿、三か四か五か六か七か八か九か十か。
かやうにおほく領せり。いかてかのそかるへき。はやく判者になし
給へ。

一はん

左 主水正龍能

我がたにうき龍雲はあつまれど 月にかけしと見つる秋かな

右 犬太郎守家

花にほえ月にはほえぬなかめをも ほしまもとや人のみるらん

判云、左の歌、月の為、うき雲を心にまかせんこと、いとあらまほしく覚え侍り。右の歌は、ほしまもとあやまたれんも、猶ねんなくきこゆ。一番なれば、いと、左を勝とすへし。

二はん

左 巳濃内侍

月みれはうきもわする、秋の夜を なかきものとはたれかいひけん

右 猪手冠者鼻堅

しなか鳥ふす猪の床の秋かせに雲もさはらぬ月をみるかな

判云、左の哥月故に夜を長しともおもはざらん、いと幽玄也。

右の山風に雲もさはらぬ月もきら／＼しくみゆ。なぞらへて持と申へきにや。

三はん

左 右馬権助長連

あふさかの山たち出てさやかなる 月をへたてぬ霧はらのこま

右 穴太律師鼠玄

よもすから秋のみそらをなかわれは 月のねすみと身は成にけり

判云、月をへたてぬ霧はらの駒、月のねすみともにゆゑありて、

勝劣いつれと申かたし。

四はん

左 唐国羚羊

と、まらぬ羊のあゆみめぐり来て いく秋月のかけになれけん

右 大角介黒丸

村時雨はれ間の月は浮雲のそらのはたれをうしとこそみれ

判云、左の哥、とし／＼の秋にめぐりあひぬる、さそと覚えてなれぬる影も身にそふ心地し侍るを、右の哥、村雲を月になしむ心、猶うきにきこゆるにや。我も、みちかつちる山路にて、独ぬれにし夕時雨の思ひ出られて、右の方人になりぬへし。

五はん

左 猿丸入道

月ふくるみ山おろしの身にしみて あきのおもひをましら鳴つ、

右 野邊興風

夜もすから虎ふす野への秋風にうそふく月の影そ更行

判云、左右ともに、除夜のかん風月の吟、優劣弁しかたく侍り。

六はん

左 関戸時繼

つれなしとゆふ附鳥のなくなへに かけそほのめく有明の月

右 萩本月住

明かたの月の光のしろうさき み、にそたかき松風のおと

判云、左のつれなしと待かねてほのめく月、めつらしくみゆ。右の松かせ誠に耳たちてきこゆ。左のかちにや侍らん。

歌合はてぬれば、おのゝ判者もてなすへしとて、めつらしきかこうとも尋出て、酒もりし、乱舞ゑんにおよひけり。事をはらて鹿は山路とほく侍れはとて、色代してたちぬ。

【第二図】歌合果て、鹿もてなされる図

〔鹿〕此御盃と御詠ともと、おもしろき軽重をわきまへかたく候。是ぞ推参のかひよと存候。鹿をは給候ましきやらん。

〔龍〕入道殿の舞おもしろく候。あはれ。

はやしのかたに候は、我身も、りう王くわうしよを舞候はんするものを。

〔鶏〕御前に候のりは、鳥かさと申候。我身ならては所持せぬものにて候。随分のちんふつにて候。

〔蛇〕わらはは、ものゝむつかしき事は常のことなれとも、此酒には多ひて候。今はきぬうちぬきて、のひゝとねはや。

〔犬〕此鳥は、片野にてふみたて、とりて候。名所のきしにて候。

〔猪〕此山のいもは、ほりもとめて候。

〔馬〕此枝まめをまくさとや人の申候はんすらん。

〔牛〕此桃、たうりんより、た、今とりて候。

〔羊〕我身はさかなもしよもうになし。た、かいしきの紙をやふり候はん。

〔虎〕下戸は異国人也。御座に参て候。其興あり。た、こ、にうそふきて、さかなをくひとらん。

〔兎〕御さかつき、とくめくりこよかし。

さて、長月になりて、十五夜の名残わずれかたくて、十二るいとも、おのゝ又詮議して、十三夜のりやうしんに、紅葉の山のおふもとを会所にかまへて、ありし判者をしやうしければ、しか思ひけるは、かやうの所へ二度のそむ事は、古人のいましめなれば、しんしやくして、心はず、めとも、さはる事侍りとて、使をかへしけり。

さきに供しはへりしたぬき、是を聞て、鹿のもてなされたりしをあなかちにうら山しくおもひけれど、われもなかははんしやにならざるへきとて、心はかりは出たちしてすい参しけり。鹿をそしと

まち入たる所へ、いてひのすかたにて、乱にうして、鹿につかんとしければ、十二類大にいかりて、是非なくおひ出して、さんくちのちしよくにそあはせける。たぬきは、からくして命はかりたすかりて、かへり出ぬ。しか待所のためきとは、是より申侍るとかや。

【第三回】狸推参して追放される図

とにかくに、めんほくなくて、此事をつくくゝとあんするに、夢まほろしの世に、よしなきかしょうけうまんの故に、三づにかへりなす。無しやうてんへんのこゝろみ、いかにてもありなん。こむかせにんそとかきおきけん、らくてんのは、むかしのさかひにつかそへて、とゑしつ、けたりし、さいきやうか哥、まことに思ひしられ侍り。心をと、むるあなの家とても、ふすへられは火たくそかし。たゝ、うろのしうしんをやめて、むろのけらくをねかはんにはしかしと思ひなりて、年ころすみなれしつかのあなを夜ふかく出て、あり明の月にあくかれけるか、三井寺の方へと心さして行けるに、をりふしあふ坂の關ちのとり、りうくわの暁をつけ、粟津のはらの鹿ろくおんのむかしをしたふ、哀にそきこえける。さて、寺中に入て、けうたいくわしやうのよりうとして、たつときひしりにあひて、出家して、けぜうばうとぞ申ける。

やかて、しゆ戒せんと申ければ、和尚のひしりいはく、此寺には、むかしよりかいたんのひしりのありしかとも、毎度山もんよりさへられて、もんほにいたるまで、七八かどにおよびてやかれぬ。我らもかたしけなくも傳教大師のよりうと申ながら、無やくのがしう

によりて、なんとのせうくかいをうく。心うく侍れともちからなしとぞ申ける。

さて、けぜうばう、しやくもんに入ぬれば、いづれの佛けうをかくしてさとりをひらくへきとあんじけり。しんごんけうは、諸しうのさい上なれば、此法をうけて三みつの行をしゆし、五ざうのくわんにちうして、即身成佛やせまし。又法華は、諸仏出世の本くわん衆生かいじやうのじやうのじんかうにて、りうちくの女しん猶成佛しければ、天台しうをかくして、一ねん三千のぐわんによりて、六根しやうくゝの位にやかなはまし。又ほつさうしゆうをうか、ひて、五ぢうゆいしきの花をもてあそび、百ほうみやうもんの月をやみが、まし。又けふのきやうをたて、蔵王権現ゆしゆつの大みね、こんがう童子おうけんのかつらきなど修行して、一たらにの行者となりて、ちしやのかしらをやふま、し。ぜんしうとは、とう時はやりたり。もとより、ぢやうりきある身なれば、座ぜんくふうして、ごだうとくほうやせましなど、しゆくゝに案しけるが、ひるにもじんじやうふつは、かゝるくちのあふなくおぼえて、他力本ぐわんにせうして、しやうとのきやうもんに入、往生のそくわいとげんとぞ思ひなりける。

いかにいはんや、なんがくは、くはんりんみやうしうしんふらん、しやうねん往生あんらくこくととのへ、めうらくは、しよけうしよざんたさいみだとの給へり。しかのみならず、本朝には、こう法はみたのめうがうを天下にひろめ、しかくは、あんじやうの念佛を山中にと、め給ふ。れうまんのゑしんのわうせうようしう、小はらの座

主のへつじのねんぶつ、みな是、けんみつの學しやとして、極樂をくはんせんし給ふ也。又はちまん大ほさつの御たくせんには、かしくしゆつり、みやうほうぎうしゆん、じやうしやうがくわう、じやうとこんらいしやばせかい、ちういこねんくふつしゆしやうとありけるよりこそ、御本地みだによらいとは定奉るなれ。□羅真子こんげんは、ねん佛の声をきくそうれしきとしめし給ふ。是念佛だうのれいてうとかや。また、みだ、のむ人は、雨夜の月なれや、雲はれねども西へこそゆけ、という哥は、まさしく真如だうの如来の御詠ぞかし。かの本ぞんじかく大師の御作、しやうしんの佛にてましませば、れうしなるべきにあらず。末代ちよく世にせうをうけ、どんこんけれつの身をえたり。うち無智をもあんぜうし、一ねんをもらいかうするみだのひぐわんにぜうして、浄土にうまれ、れんだいののぼりてこそ、けぜう房にてはあらんすれと思ひさだめて、草のいほりをむすび、麻の衣をきて、ひとすちにせうめうおこたらすして、修行し侍けるが、幾ほともなく、せうひやう小なうしやうねんしやうちにして、をほりにけり。めでたかりける往生とそきこえし。

【第四回】狸、草庵にて念仏往生の所